

### 第三節 公共交通機関

土佐くろしお鉄道「ごめん・なはり線」

平成十四(二〇〇二)年七月一日、土佐くろしお鉄道「ごめん・なはり線」(工事線名「阿佐線」)が全線開業し、昭和四十九(一九七四)年四月に土佐電気鉄道安芸線(後免～安芸間)が廃止されて以来、鉄道のない時代を送っていた高知県東部に二八年ぶりに鉄道時代が再来した。

この路線はJR土讃線の後免駅(南国市)を起点とし、奈半利駅を終点とする路線距離(営業キロ)四二・七<sup>キ</sup>の鉄道路線(全線単線・非電化)で、「ごめん・なはり線」と愛称され、高知県を主体とする第三セクター「土佐くろしお鉄道株」によって運営されている。駅数は二〇で、吉川村には「よしかわ駅」が設置され、よしかわ駅～JR高知駅間を乗り換えなしで三四分、よしかわ駅～奈半利駅を四九分で結ぶ。

ごめん・なはり線建設の歴史は古く、当初は徳島県海部郡牟岐町の牟岐駅と高知県南国市の後免駅を結ぶ国鉄のローカル新線「阿佐線」として計画された。昭和四十年三月に安芸～田野間が着工したが、こ



ごめん・なはり線開業の日のよしかわ駅

のとき後免～安芸間には既に昭和五年に開業した土佐電気鉄道(以下、「土電」)による私鉄路線「安芸線」が営業していた。しかし土電安芸線は、昭和四十年代半ばになると貨物輸送の廃止や車社会モータリゼーションによる旅客収入の減少などにより赤字が拡大し続けたため、昭和四十九年四月、土電安芸線の軌道用地を国鉄(当時)に売却し、その跡地を国鉄が利用することで国鉄阿佐線の建設が促進されると考え、自ら安芸線廃止の道を選んだ。これが県東部が鉄道のない時代を迎えることとなった経緯である。

土電安芸線が廃止された翌年の十月、阿佐線建設を担う日本鉄道建設公団は廃線跡地の多くを流用して後免～安芸間の高架橋の工事に着手した。しかし、今度は国鉄の財政悪化が顕著になり、昭和五十五年十二月の日本国有鉄道経営再建促進特別措置法(国鉄再建法)の施行により、翌五十六年九月、建設線であった阿佐線の工事は凍結されることになった。

工事再開を望む声の高まりを受けて、昭和六十一年五月に設立されたのが第三セクター「土佐くろしお鉄道株」(社長は高知県知事、会員は沿線の市町村長、高知商工会議所会頭、四国銀行頭取、高知銀行頭取等)である。同社は昭和六十三年一月に後免～奈半利間の第一種鉄道事業免許を取得、開業目標を平成八年度に定め、昭和六十三年三月に南国市東崎で起工したが、その後、工事は遅々として進まなかった。このとき同社は、阿佐線と同じく建設線であった宿毛線(宿毛～中村間)も一緒に引き継いだため、建設の優先順位の選択を迫られた県は、当面宿毛線の建設に力を傾けることを決断した。これが、阿佐線(ごめん・なはり線)建設の予算獲得が進まず、建設が進捗しなかった最大の理由である。

建設が遅れたもう一つの理由に、用地交渉が難航したことが挙げられる。特に平成六年度の工事は南国市での用地交渉が困難を極め、野市町に路線変更して進めるなどしたが、吉川村でも用地買収をめぐる紛糾

第3節 公共交通機関

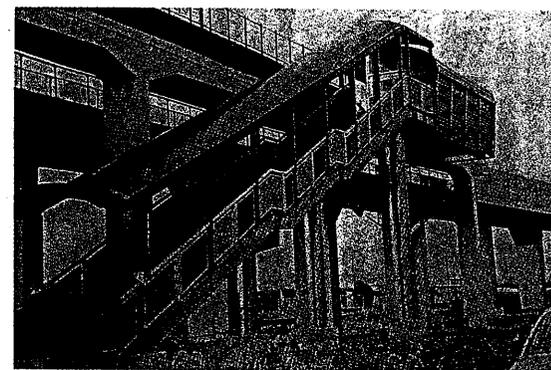
があった。吉川村内の路線延長は約一・五キロで、野市町から烏川沿いに古川地区を通り、香宗川を渡り赤岡町へ抜けるルートであり、これはかつての土電安芸線の軌道跡地であったが、古川地区の軌道跡地には既に農道（池田線）が整備されていたため、地域住民や耕作者の大部分が反対を唱えるなどした。

用地交渉も調い、ごめん・なはり線全体の工事の再開が本格化したのは平成十四年度のことである。このとき「よさこい高知国体」（第五七回国民体育大会）の平成十四年開催が決定し、また平成九年十月に宿毛線が開業したことで、ごめん・なはり線建設に集中できる条件が整ったためである。開通目標は平成十四年六月に再設定され、大幅な遅れを解消すべく建設工事が急ピッチで進められた。

よしかわ駅

平成十四（二〇〇二）年七月一日、ごめん・なはり線の開業とともに新しい「よしかわ駅」の竣工開業式が行われた。かつての土電安芸線の時代に吉川村に設置された駅は「古川駅」で、ごめん・なはり線において吉川の名を冠する駅が初めて誕生したわけである。計画段階では「吉川駅」と仮称されたが、JR東日本の武蔵野線に同名の吉川駅（埼玉県）が存在するため、平仮名表記に改められた。

よしかわ駅は単式一面一線のホームを有する高架駅で、駅舎のない無人駅のため、利用客は屋根付きの階段を上って、上屋の設置された



よしかわ駅

ホームに直接入る。駅前には約八台収容の駐車場も備えられた。

バス以外に地域を結ぶ公共交通機関のなかった当村は、鉄道の開通と新駅の設置を歓迎したが、駅へのアクセスが課題となった。そこで、よしかわ駅から役場を経由して、のいち駅、JA高知病院（南国市）に至るバス路線が香我美町の平和観光株に委託して運行された。

ごめん・なはり線の開業後、沿線関係団体は同線の知名度を高めるためのキャラクター戦略と地域住民のマイレール意識の啓発、鉄道支援組織の立ち上げ等を通して利用客増に取り組んだ。全二〇駅のそれぞれに、香北町出身の漫画家・やなせたかし氏が造形したキャラクターが設定され、よしかわ駅のキャラクター「よしかわうなお君」は吉川村で養殖が盛んだったウナギがモチーフになっている。

一方、開業と同時に阿佐線建設促進協議会を母体とする「ごめん・なはり線活性化協議会」が組織され、平成十四年十二月にはその事務局としてNPO法人「ごめん・なはり線を支援する会」が設立された。同会はファンクラブ「ごめん・なはり線友の会」の運営をはじめ、鉄道を活用した各種イベントを企画・運営し、利用促進を通し鉄道運営の支援に努めている。よしかわ駅の乗降客数は図表4-3-1のとおりである。

図表 4-3-1 よしかわ駅の阿佐線乗降客数の推移

(単位：人)

区分 年度	乗車人員	降車人員	合計	1日平均 乗降人員
平成14	2,511	2,549	5,060	19
平成15	3,118	4,073	7,191	20
平成16	2,785	4,572	7,357	20
平成17	1,448	1,985	3,433	9

注：平成14年は7月1日開業のため9か月分の実績  
資料：香南市



© やなせたかし

よしかわ駅のイメージ  
キャラクター「よしかわ  
うなお君」